つつきの

平成22年10月1日発行
第3号
京田辺市観光ボランティア
ガイド協会広報部編集

eラーニング「継体天皇ゆかりの伝承地をたずねて」を現在収録中

筒城宮跡

平成２２年度研修部の事業計画の１つ「ｅラーニング」の製作作業に入っております。平成２３年は京田辺市に、継体天皇が「筒城宮」を開いて１５００年を迎えます。これに連動し、「継体天皇ゆかりの伝承地を訪ねて」と題し、京田辺市内にある継体天皇ゆかりの伝承地、古墳、神社仏閣を紹介します。紹介する伝承地、古墳など、それぞれの事柄を決定する証拠は乏しいのですが、ボランティアの目線で紹介します。２３年４月放映予定。ご期待ください。

瑞應山　法華寺

大住岡村にある法華寺を訪ねました。
比較的新しい薬医門をくぐると、塵ひとつなく掃き清められ、「浄土を地上に建設する」と説かれた宗祖日蓮上人の教えを表すかのような境内でした。

山門（薬医門）

平成３年に改築された本堂に案内され、どことなく「鹿児島の西郷さん」に似ておられるご住職自ら、お寺の案内をしていただいた。門外漢の我々にも理解できるよう判り易い言葉で話され、資料の提供や「日蓮宗いのちに合掌」と題するＤＶＤを視聴させていただいた。「いのちは第一の宝、来世に望みを託すのではなく、今生きているこの世界こそが浄土」との思想や、あまたの法難をものともせず「南無妙法蓮華」のお題目を広げ、衆生の救済に命をかけた日蓮上人の生涯に心を動かされました。

寺の沿革

庭の石碑

宗派は日蓮宗。京田辺市内の日蓮宗の寺は当寺のみで、南山城にも多賀の眞蔵院があるのみ。室町時代の京都では［洛中二十一ヵ寺本山］とよばれる強力な寺院群を建立し、戦国時代に至り「皆法華」といわれるほどの勢力になったが、この山城地域には波及しなかったようです。

寺の歴史

江戸時代の初め、寛永１５年（１６３８）、当地澤井家の縁者である喜見院日便上人が曇華院の宮と三宝院門跡から寺領を拝領し、本圀寺第１７世・鷲峰院日桓大僧正直筆の「大曼荼羅御本尊」を頂き、三宝院流真言宗の大日堂盛行庵を改宗し、法華宗として開山された。山号の端應は曇華院ゆかりの三千年に１度咲くという優曇華（うどんげ）の別名です。

優曇華の１つ、木蓮科の山玉蘭

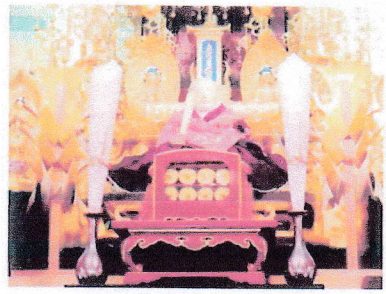
本堂、庫裏

平成３年、開山日便上人の 350 回忌に合わせて改築された。

本堂

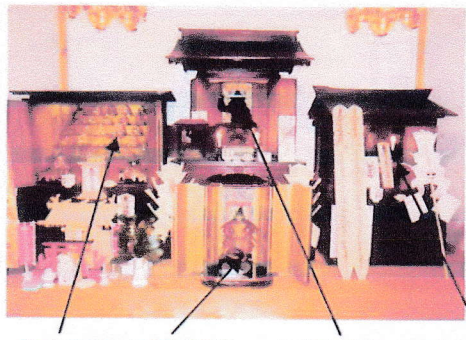
本尊及び仏像

本堂内陣の中央に宝塔を挟んで釈迦如来、多寶如来の木造坐像を祀り、一段下がった中央に日蓮上人木造坐像、その両脇に地湧した四菩薩（上行、無邊行、浄行、安立行）の木造立像を祀る。これは法華宗の大曼荼羅御本尊を立体化したものです。



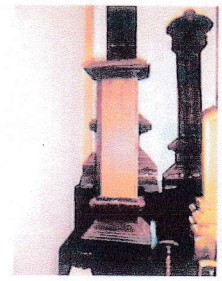
大曼荼羅の御本尊

向って右の脇檀には日替わりで国土を守護する三十番神、霊験あらたかな妙見大菩薩、法華経に帰依した清正公や子安鬼子母神を祀る。

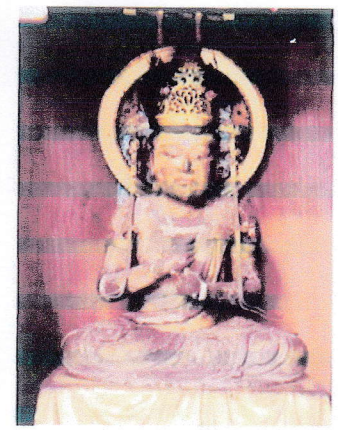


三十番神　加藤清正像　妙見大菩薩　子安鬼子母神

左の脇檀には現本堂改築時まで境内にあった大日堂の本尊で室町時代初期の作（西村公朝師鑑定）である大日如来木坐像が厨子内に祀られている。この大日如来は古くから地元民の間では雷除けの神として信仰があった。



曇華院ゆかりの位牌



大日如来　雷除けの神

現在は法華経信仰に基ずいて法華別勧請されている。

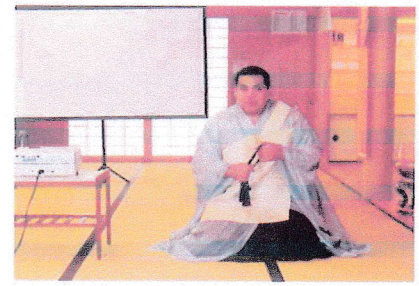
また蛤御門の変で焼け出され、澤井家を仮御所とされた曇華院の宮が預けられた大きな霊牌も安置されている。

寺の什宝である開山日便上人筆「大曼荼羅御本尊」や本圀寺第１７世・鷲峰院日桓大僧正筆「大曼荼羅御本尊」などを拝見した。

日桓僧正の大曼荼羅図

日便上人の大曼荼羅図

山城地方では数少ない日蓮宗の教えだけに、ご住職の情熱あふれるお話は新鮮で、感動的でした。また奥様の心温まる接待を受け、参加した会員一同、感謝しつつ寺を後にした。合掌



法華寺住職　中純日梵上人

シリーズ　ガイド豆知識
「門の知識」　その２

（10）高麗門（こうらいもん）

城閣門で、本柱の上に切妻屋根があり、それに直角に本柱と控柱の上に切妻屋根がある。
本屋根に直角に切妻屋根が付いている。(開いたときの扉の雨除け)

高麗門　　京都御苑　中立売御門

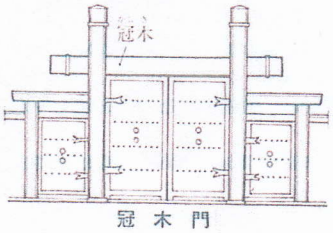
高麗門　澤井家の黒門

(11)：長屋門：長屋の中間にある門。大名屋敷に多く見られ、軒が一連続きとなっている。

長屋門
京都上桂
山口家

長屋門　　京都　閑院宮跡

(12)　冠木門（かぶきもん）：冠木(笠木)と呼ぶ横木を２本の門柱の上方に貫き渡してある門で、屋根はない。

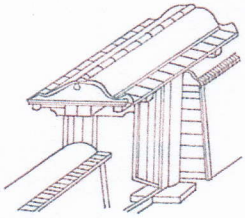


冠　木　門

冠木門　　東本願寺渉成園

(13)上土門（あげつちもん）

棟門の水平な屋根に土を乗せた門。



上　土　門

(14)その他

櫓門　姫路城

穴門　京都御所

漢門（牌桜式）万福寺

「学ぶは楽しく、心が癒される」

この春、観光ボランティアガイドの一員となり、まだ十分なガイドの経験はなく、名所・旧跡を学んでいる途上であるが、幾つかの新たな発見と、生活に潤いをもらしてくれている。

①京田辺の再発見・・・筒城宮、多々羅、越前、など謎多き解明されていない所が近隣にあり、時間をつくり現地周辺を訪れる。その際には、地元の人から言い伝えを聞き、資料で得た以外の情報を入手すると嬉しくなる。特に、人の生き方・心温まる話に出会うと感動を覚える。

②素晴らしき人材の輩出・・・伊藤惹冲、藤林普山、郷土史研究家等、先人の熱意ある活動ぶりには、あらためて敬意を表する。

③自然とのふれあい・・・現地へは、自転車で訪れ、土・草木・花鳥・風を味わうと自らの心が癒される。

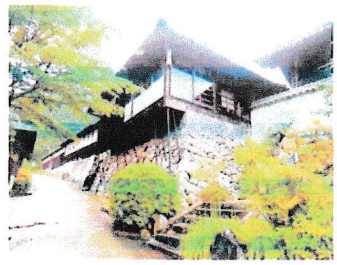
古代から伝統ある”つつき”の文化・思い・知恵を学び、広く人々に伝えていくことが我々の使命の一端と思うとともに、『命とこころを繋ぐ』私のライフワークにしたい。（伊藤）

管外研修報告

６月１８日、小雨模様の中、三期生を迎えたボランティアガイド２０名は、昨年からのテーマの続きである継体天皇の足跡を訪ねて、桜井の磐余方面を中心に一日研修バス旅行を行いました。

まず桜井市の南奥の聖林寺に立ち寄り、京田辺市観音寺の十一面観像（国宝）と兄弟仏といわれている十一面観音立像（国宝）を拝観し、お姿が似ている中にもそれぞれ特徴がある事を再確認しました。

聖林寺より箸墓古墳を望む



聖林寺入口

次にバスで１０分程度の距離にある安倍文殊院では、日本三文殊の一つで、丈六の文殊菩薩坐像（重文・鎌倉時代、快慶作）を拝観しました。平城遷都1300年祭にちなみ、４０年ぶりに台座の獅子から降りられた貴重なお姿を拝する事が出来ました。

継体天皇の磐余玉穂(いわれたまほ)宮伝承地では、筒城宮同様、考古学的物証は何もないものの、香具山東側の推定磐余池の畔に立ち、１４８５年前の宮跡に思いを馳せ、特異な天皇の謎とロマンに浸りました。

帰路は天理市の三角縁神獣鏡で有名な黒塚古墳に寄った後、山の辺の道横の継体天皇皇后手白香皇女陵（衾田陵）と宮内庁が比定する大きな古墳にも立ち寄り、築造年代の矛盾を感じながら更に謎を深めました。盛り沢山で行程は強行だったが、無事消化し、今後のガイド活動に少しでも生かせるよう祈りつつ無事帰路につきました。（土居厚）